

私の故郷は愛媛県西条市で、男兄弟七人の末っ子として生まれた。父は大柄で若い時は元気で村の消防団にいたのだが、ある年、台風が来てその対策に取り組んでいた折、積み上げていた材木がぐずれ、足をはさまれて大怪我をした。それ以来、松山の日赤、今治病院、西条はもちろん岡山医大等に入院治療を受けていた。しかし思うように回復せず、十年近く家にこもりがちであった。

父はいつもキセルで刻みたばこの「萩」を吸っていた。そして月に一、二度「朝日」の巻たばこを買いに行かされた。たばこ屋までは四、五百メートル位だったろうか。よく走って行った。そのお釣りをためて学校貯金に足したものだ。兄達もたばこが好きでよく買いにいかされた。その父は、四六歳の秋に他界した。

私はクラスの中でも腕白小僧だった。けんかをしても一対一であれば負けたことがなかったし、走ってもクラスで二、三番だった。勉強の方は、ちょっと恥ずかしいが中位だった。

五年生の春、学校での健康診断で病気らしいと告げられた。しかし痛い所もかゆい所もなく元気いっぱいだったが、母や兄たちは心配していた。その様子をみるにつけ私も不安になり、診察のためといわれて大島青松園にくることになった。昭和十七年七月のある朝早く、兄に連れられて私は家を出た。

高松棧橋に着くと、同じ病氣らしい人達が各方面から来ていて、共に大島丸に乗り込んだ。しかしあまり多いので三園に振り分けられ、青松園には私を含めて十七名、他の二十名程は岡山県の光明園と愛生園に行ったとか。

（磯野さんが今年、「我が家の一世紀」と題してまとめた手記では、付き添ってくれた次男のお兄さんとの別れをこう振り返っています。）

私は兄の後へ着いて棧橋へ行こうとすると、福祉の係の人が、「これからこっちは有菌地帯と無菌地帯で分かれている」と言い、有刺鉄線がはりめぐらされているところを指差され、「もうこっちに来てはいかん」と言う。そのせいで棧橋へ行って見送ることもできなかった。仕方なく私は遠回りをして、渚の方へ行き、棧橋を正面に見るようにして兄を送った。その時に船が出て行くその様を見ながら、日頃涙したことない私だったが、そのときばかりは打ちぬきのように涙がほとばしって頬を伝い、砂地にこぼすほどであった。

大島は墓標の松で海岸は緑いっぱい、渚は白砂でまばゆいばかり。そのすばらしさは、重い心を軽くしてくれるというより、いっそう悲しく感じさせられた。収容所に三日間いると少年寮の寮父森川さん、そして上級生の人達が迎えにきて、少年舎へ連れていってくれた。

寮父の森川さんは、あれこれと教えてくれた。とても優しい人だった。そうして少しづつ慣れていった。上級生や下級生、少女舎の者と学校へ行ったり海で泳いだり、秋から冬になるとドッジボールや陣とり等で過ごした。

戦争も苛烈になり、耐乏生活が続ぎ、配給のマッチも数えて分けた。それが一〇本のうち折れたり発火せずジュージューとなり、使えるのは五、六本位しかなかった。主食の飯は麦米半々、昼、夕は芋飯や大豆飯、また玄米食等がでた。副食として朝は入園者が作った葱か菜っ葉の味噌汁に沢庵漬がついた。昼は入園者が作った野菜や芋等の一菜、夕は生塩がおかずがわりに、また代用食の乾麺が半束、飯がわりに出された。こうした貧しい食

事が続いたためか、昭和十九年は死亡者が九三人、二十年には六十名程亡くなった。その一方で、青年団や奉仕団、また少年の私たちまでかりだされ防空壕掘りをした。もう半年戦争が続けば、西の浜へ抜けるほどまで奥深く掘っていた。

八月十五日正午に重大放送がなされると前日に言われていた。その放送がまもなくあるという知らせがあつて、海で泳いでいた私は、すぐに泳ぎをやめて浜へあがつた。風もなく、海はコバルトブルーに凧いでいた。浜へ足を踏み出すと砂は熱く、足裏が焼けつくようだった。海ぞいに浜昼顔が一面に咲きほこり、その緑とピンクの花が、目にするどくとびこんできた。重大放送の前に少し心のゆとりを感じながら、少年寮に帰ってきた。しばらくすると園内スピーカーからガーガー、ヒューヒュー言葉らしきものが聞こえたが、内容は分からないまま終わった。夕方になると、誰言うともなく日本は無条件降伏をしたとか。私たちは軍国教育を受けていたので、そんなことはない、神風が吹くんだと口々に言っていた。もし、進駐軍が来たらわれわれ病者は、太平洋に沈めるとか、南方の無人島へ連れていくといった流言飛語を耳にした。そうした折も折、青松園へ連れてきてくれた兄が戦死した、との知らせが故郷のおふくろから手紙で届いた。少年の私の胸は悲しみと憤りに、何か呆然とし、悶々とした半年を過ごした。